

令和3年度岡山県農林水産総合センター畜産研究所試験研究課題評価結果票

＜事前評価＞

総合評価凡例 5：優先的に継続することが適当 4：継続することが適当
 3：計画変更して継続することが適当 2：継続の必要性が低い
 1：中止すべきである

番号	R3-事前-1						
課題名	家畜伝染病発生農場における封じ込め措置完了後の速やかな堆肥化技術の検討						
課題の概要	高病原性鳥インフルエンザ発生時にウイルス汚染物品となる農場内鶏ふんについては、防疫指針により一定温度以上での発酵消毒が求められている。対象となる鶏ふんが低水分、消毒資材混合など、発酵温度上昇の阻害要因を持つ場合の適正処理方法について検討する。						
評価結果	区 分	5点	4点	3点	2点	1点	平均点
	必要性	2人	2人	2人			3.8
	有効性	1人	2人	2人	1人		3.3
	効率性・妥当性		3人	3人			3.5
	総合評価	1人	3人	2人			3.8
助言・指摘事項等	<ul style="list-style-type: none"> ・家畜伝染病が発生した農場の堆肥再処理については、岡山県内で実際に発生していることを考えると、早急に対応策を整える必要がある。とくに、平飼い鶏舎での発酵消毒の経験がないとのことなので、低水分条件下での処理方法を確立することは重要である。本課題は、その目標達成に向けた取り組みであり、平時での応用場面もあるため、実施することの「必要性」「有効性」は十分にあると判断できる。さらに、再処理の方法も、安価な資材を利用しており、費用対効果も期待できる。 ・汚染物質の防疫指針等をクリアする堆肥が出来るのであれば、農場経営に寄与すると考えるのでこの研究の成果に期待したい。 ・条件が低水分であるため、発酵状態だけでなく、消毒の効果を容易かつ安価に診断するための手法も合わせて示していただきたい。 ・再堆肥化された堆肥は通常の堆肥と比較して、有効成分等の違いはあるのでしょうか。 ・必要性は十分認められるが、この研究内容に3カ年が必要であるとは思えない。2年間で研究成果を出して、3年目は普及定着を図る計画にしているかどうか。研究期間に追跡調査の一年を組み込む必要があると考える。 ・防疫指針等をクリアした堆肥であっても、安全に使用できることについて、周知をどのように行うかを考えていただきたい。 ・温度が重要な指標となるので、実規模ではどれほど堆肥化が不均一なのか、それらを小規模試験でどのように把握できるのかなども示していただきたい。 						

<事前評価>

総合評価凡例 5：優先的に継続することが適当 4：継続することが適当
 3：計画変更して継続することが適当 2：継続の必要性が低い
 1：中止すべきである

番号	R3-事前-2						
課題名	牛伝染性リンパ腫（EBL）発生予防のための調査研究						
課題の概要	<p>全国的に発症頭数が増加傾向にある牛伝染性リンパ腫（EBL）には、現在、ワクチンや治療法がなく、感染が見つかった場合の対策としては感染牛の淘汰か、感染牛隔離による蔓延予防策しか対処法がないのが現状である。</p> <p>近年、EBL 発症抵抗性遺伝子の存在が確認されており、遺伝子保有牛を活用した清浄化の可能性を検討する。</p>						
評価結果	区分	5点	4点	3点	2点	1点	平均点
	必要性	2人	4人				4.2
	有効性	1人	3人	2人			3.6
	効率性・妥当性		5人		1人		3.6
	総合評価		5人	1人			3.8
助言・指摘事項等	<ul style="list-style-type: none"> EBLの問題は、近い将来確実に大きな問題になるとされている。実際に家畜取引の判断材料にされる事例も出始めており、早い段階で対策を講じる必要がある。本課題は、その意味でも将来を見据えた重要なものであり、有効な成果を期待したい。 発症抵抗性遺伝子の保有牛が作出できれば子牛の販売にも寄与すると考える。また、精肉販売においてもより安心安全を消費者に説明できるので、今後の成果に期待したい。 本課題の成果が社会実装されるためには時間を要することが予想されるため、それまでの間取るべき対策を合わせて検討すると、実効性が高まると考えられる。まずは、県内における感染状況を把握し、EBL 発生抵抗性遺伝子の保有状況との関係、および、発生状況との関係を解析すると、本課題で得られる成果の有効な利用法が見えてくるものと思われる。 抵抗性遺伝子を保有する牛が13%とお聞きしました。その数値から発症リスクの低い牛を作出するのはやはり長期化すると考えられます。肉牛だけではなく、乳牛も併用して調査を行う方が良いのではと感じました。 本疾病は乳牛農家の浸潤状況の方が高く、和牛の借腹ともなるため乳牛の調査も同時に行う必要があると考える。 EBL 清浄化は日本の畜産における長年の課題であり、若齢発症も増加している。このような中、本県だけで研究を進めるのではなく、動物衛生研究所や大学等外部機関と連携して進めていただきたい。 消費者の理解を得ることが難しい課題であり、成果をどのように公表するか/できるか、関係機関と協議して準備していただきたい。 到達目標、達成目標をどこに置くか数値を示す努力も必要で、短期間では成果が得られにくいからこそ具体的な記述を心掛けていただきたい。 						

<事後評価>

総合評価凡例 5：著しい成果が得られた 4：十分な成果が得られた
 3：一定の成果が得られた 2：見込んだ成果を下回った
 1：成果が得られなかった

番号	R3-事後-1						
課題名	ダメ堆肥をどうにかする技術の開発						
課題の概要	家畜排せつ物の処理において、水分調整を失敗するなどして嫌気性発酵が進行した堆肥化物（以下、ダメ堆肥）からは、大量の悪臭原因物質が発生し、苦情の原因の一つになっている。そこで、ダメ堆肥ができる条件を把握し、ダメ堆肥の適切な再処理の方法を確立することで、家畜排せつ物の適正な処理と良質な家畜ふん堆肥のさらなる利用の促進を図る。						
評価結果	区分	5点	4点	3点	2点	1点	平均点
	目標達成度		1人	5人			3.2
	有効性（効果）		1人	5人			3.2
	有効性（目的以外の成果）		1人	5人			3.2
	効率性・妥当性（費用対効果）		1人	5人			3.2
	効率性・妥当性（計画）			6人			3.0
	成果の活用・発展性		2人	2人	2人		3.0
	総合評価		2人	4人			3.3
助言・指摘事項等	<ul style="list-style-type: none"> ・ダメ堆肥の発生要因と再生化技術が示され、当初の目標が達成されたと判断した。 ・悪臭の出る条件を周知することで、まずはダメ堆肥の量を減らし、出来た場合の再生処理方法を確立周知頂くことは、大変有意義と考える。 ・ダメ堆肥を発生させるような営農現場では、そもそも水分調整がうまくできないことが予想されることから、そのような現場への適切な堆肥製造法を普及することが基本になると考えられる。その補完的技術として本法を位置づけると、有効であると考えられる。 ・本技術の普及に向けて、指導者を対象にした研修等を予定されているとのことなので、分かりやすいマニュアル（テキスト）の作成にも引き続き取り組んでいただきたい。 ・早急に生産者に還元できるように、県民局等指導者に対して速やかに取組成果の研修を行っていただきたい。また、研究を始める段階から普及定着までのスケジューリングを組み込むことが必要だと考える。 ・是非、県内生産者の実態調査を行い、実用技術としての完成度を高めていただきたい。 ・他機関と協力して、実用化事業を立ち上げることにもチャレンジしてほしい。 						